

日系アメリカ人として 映画『硫黄島からの手紙』の脚本を 執筆したアイリス・ヤマシタさん

Ms. Iris Yamashita

アイリス・ヤマシタ ●日系アメリカ人の脚本家。ミズーリ州生まれ、ハワイ育ち。グアムや日本でも暮らしたことがある。カリフォルニア大学パーカー校で機械工学修士号を取得。脚本を書いた映画『硫黄島からの手紙』は全米映画評議会とロサンゼルス映画批評家協会の最優秀作品賞、2006年度ゴールデン・グローブ賞の最優秀外国映画賞、アカデミー賞では最優秀作品賞、オリジナル脚本賞を含む4つのオスカー賞にノミネートされた

撮影：高木あつ子（下も同じ）



ヤパンファウンデーション日米センターが全米日系人博物館との共催で実施した公開シンポジウム『変わりゆく日本のイメージ？——米メディア界で活躍する日系人の見方』（2007年10月11日）のパネリストとして来日。ハリウッドの世界で語られる日本・日本人のイメージとその変容について発表し、多数の聴衆を魅了しました。

実際にお会いしてみると、ヤマシタ氏は物腰が柔らかで、笑顔がやさしい、ふんわりとした印象の方です。実は理系、と聞いてびっくり。機械工学の大学院を卒業後、プログラマーの仕事をする一方で、小説家への夢を追い続けました。2つの小編がANAの機内雑誌「翼の王国」に掲載され、米国のビッグベアレイク脚本コンテストで優勝。映画『硫黄島からの手紙』監督のクリント・イーストウッド氏と製作総指揮のポール・ハギス氏の目に留まることになりました。ヤマシタ氏の脚本は、アカデミー賞のオリジナル脚本賞にノミネートされ、世界中で賞賛を受けました。

「作家として、いつも登場人物の視点で考え、背景文化を正確に理解しようと務めます」というヤマシタ氏。執筆には、多くの文献を調べ、来日してインタビューを行ない、できるだけ戦時下の日本人の心理を忠実に表現しようと苦労したそうです。特に本映画では、「日系人としてのバックグラウンドやアイデンティティが、登場人物（日本人）の性格や考え方をより本質的に捉える上で大きな助けとなった」と語っています。大学時代の1年間の交換留学によって得た経験も脚本づくりに役立ったそうです。

ヤマシタ氏は、戦後ミズーリ州に移住した日本人の両親のもとに生まれた日系アメリカ人2世。戦前の移民のこどもで戦中を生きたいわゆる「日系2世」と區別して、「新日系2世」と呼ばれることがあります。シンポジウムでは、自身のエスニシティについて、次のように力強く語りました。「日系だからこそ自分は特別だと思っています。（本映画で脚本を書いたように）マイノリティだからこそ、できる仕事もあるのです」。

同時にヤマシタ氏は「この映画では、基本的には皆同じだということを伝えたかった」とも話しています。「日本人も日系人も米国人も、同じように家族を思い、食べ物を求める。そこに流れる基本的な感情は同じだ」というメッセージを伝えたかったのです。広い視野を持ち、常にポジティブに、真摯に作品に向き合うヤマシタ氏。次の作品がとてもしみです。

（瀧田あゆみ 日米センター知的交流課）



2007年10月11日の公開シンポジウム『変わりゆく日本のイメージ？——米メディア界で活躍する日系人の見方』（経団連ホール）のパネルディスカッションには、ヤマシタ氏とともにサチ・コト氏（元CNNニュース・アンカー）、フランク・バックレー氏（ロサンゼルスKTLAニュース・アンカー）が加わった